

北京騷擾 その三

中島八十一

當時、北京の賃貸乗用車の半數は人力車及びタイに見るトゥクトゥクに似たる三輪自動車なりけり。天壇より二臺のタクシーに分乗して天安門に向ふ。車内は天壇見學にてまづはひとつ觀光したりと満足感に満ち、道路脇の風景も穩かなり。今になりたれば、よくぞ天安門に向ひたると思へど、目指すレストランは天安門廣場の西側百メートルに位置し、天安門と廣場を隔つる大路に面したり。要するに天安門廣場の隣接地にて夕餐攝りたり。誰手配したりや、畢竟同行の中國人にこそあるらめ。北京におけるあらゆる物價のあまりに安き事、にはかには信じがたきも、それ故タクシーは歸さずそのまま留め置きたり。

何を食べたりや、記憶をたどるに、一品のみ千切りにしたる豚の脂身單體を炒めたる料理、これ脂を感じしむることなく、コラーゲンのみを食する感觸強く印象に残れり。廣東料理ならんか。歡を盡して語り合ひ、実に悠長なる時間を過して、十分に満ちたりて店を出でたれば夏至近きにも拘はらず日は疾うに暮れ、大路は街路灯に煌々と照らされたり。はて留め置きたるタクシーのいづくにか立ち去りたる。のみならず、周邊は何やら不穩なるざわつきに満ちてをり。満腹なれば、なほのこと不在のタクシーをなじるばかりにて、思ふは疾くホテルに戻らんことのみ。その時すでに騷動の起りたるや今になりても不明なるも、タクシーは危機の起りたるを知ればこそその場より逃げたるに違ひなからめ。

なほもタクシーの一臺なりとも通らずやと大路を探すに、突然背囊を負ひたる完全武装兵の一群となりて喊聲を上げ左から近づき、目前を右に廣場に向けなだれ込みたり。まさに吶喊なり。人數は定かならざるも、小隊なりや、中隊なりや、少なからざりし。かやうなる兵の通過を呆然として見送るばかりにて何が起りたりや理解及ばず、それゆゑ緊張も恐怖も無きに、ただただ傍觀者として佇めり。

兵の一群まさに目前を通り過ぎんとせんとするに一人の兵士轉倒せり。隊はその兵士を置き去り遠ざかりたり。兵は重裝備なれば直ちに起ること適はざるが如し。その段になり初めて氣付きたるに、大路の兩側に見物と思しき大衆の屯たむろすること多數なり。本隊の廣場突入を見届けたる上で、群衆の中より申し合はせたる如く十人ばかり兵士に近づき、目前にて暴行を加へたり。數分間のことなりや、慘劇を見たる者にはさても長き時間に思へたり。人の圍みの解けたる後には息絶えて動かざる仰向けの兵士一人残り。殺人の目視は余の生活史にあつてまさにこの時のみ、空前絶後なり。

そこから急に素早き行動開始す。同行の中國人の手引きにて群衆の中通り抜け、中途で装甲車の脇もすり抜けたり。進むに連れて群衆の数はみるみる増し、人波を掻き分けて進みたる有様にて、まさに紆余曲折の後に地下鐵の駅に辿り著く。地下の駅構内に入りたれば、豈圖らんやその場の平穩、人數も少なきに驚きたり。切符購入の有無辿り得ざるも、何事もあらざるかの如く進入せる地下鐵の車輛に乗り、乗客少なきに樂に坐り得たれば、そのままホテルに著きたるまで如何なる障碍にも出會はず。自室に還りたるに特段の事情にかかはる情報は傳へられず、テレビは放映停止したり。鈍感の故か、余はいかなる環境にあらんとも、入眠に難澁することなし。

續

(令和四年八月十八日受附)